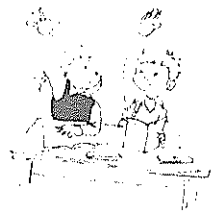


相談所泣かせのお母さん

南国市教育相談所 高石文一



教育熱心なお母さんが、嫁と六年生の男の子の孫をつれて、教育相談所を訪ねて来られた。

「血圧の高いこともあってこれまで出たことはなかったのですが、先日母親代りに学校参観に行きました。どうもこんなことではあるまいかとは思っていましたが、あまりのことにじっとしていられなくなりました。」

体は小さい方ではないのに、前のはしの席にすわらされています。一時間目はテストでしたが、用紙が配ばられちよっと書いていたかと思うと、すぐ横を向いたり後を向いたりして、「おい君はやったか。はよう書けよ」などとやって他人の心配ばかりしています。二時間目は社会科でしたが、先生が何かいうと「それはそうぞ」「そんなことがあるか」などと大声をあげています。私ははさかしくして……。もう六年生ですから、もう少ししつかりしてもらいたいと思います。「なるほど、悪気はないようですね。本人は楽しくやっていますよ。ですが、学級にこのような者がいると授業が進むこともありすが、

少し問題を考えたり、じっくりと文章を味わってみる必要があるときにはじやまになり、授業がうすつべらなものになるので先生にはあまり喜ばれないのですね。」

「わんの子ではないが、落ち着きのないことは確かかなようである。お母さんが話している間もじつとしておれず、いすの手すりをしきりにつめでこすっている。」

この子は「不安」を持っている。その不安の原因を、今明らかにしようと思わず、しばらく母子で相談所に通って来らせ、経過を見てみることにしてみよう。話し合いの結果、当分の間、毎日放課後母親がつれて来ることにした。

翌日の午後、相談室のドアをきちんと開けて、大声で「おい」と言いつて入り、カバンを応接机の上に乗せて出したのは驚いた。長い間学校生活をしてきたが、今だからって、職員室や校長室においと言つて入ってきた生徒を見たことがない。

「そうか。一人で来たのはうれしい。しかし、ひとの部屋に入るのにおいなどと云つてはいかんよ。もう六年生だから。入口のところで止まって「入つていいですか」と声をかける。そうすると中の人が、お入りとか何とか言うので、それを待ってから入ること。今日は隣の部屋に館長さんが来ているので、この手紙を持っていくてく

ださい。入口でちゃんと入つていいですか、と声をかけるんですよ。」

「うん」
「うんではない。はい」
「はい」
隣の部屋に声をかけて入つていった。教えられるのである。次の日はちゃんと入つていいですか、と元気にあいさつして来る。カバンの中から採点済みのテスト用紙を次から次へと、取り出す。百点の算数テストがある。七十五点の社会科もある。

「百点の算数のテスト、すごいね。たいしたものだよ。算数は好きかね。」
「算数と体育は自信がある。」
「社会科は残念、一つ違ったね。」

「ハイ、これは勘違いしたので。」
「これは何かね。」
「マラソン大会の賞状です。一番から十番まで校長先生からもらえます。十番だったのでもらいました。」

「それはうれしい。お母さんにも見せたかね。」
「うん、お母さんは見ん。言つても無益。」
「どうして？」

「お母さんは帰ってきてごはんを食べたら、だれたと言つてばたんきゆうで寝てしまふ。テストを見にくれたこともない。学校参観日にも、運動会にも来てくれたことがない。」

お母さんに認めてもらえない子ども。それがどんなにさびしいものか。これでこの子はよくここまでこれたものと思う。持つて生まれた力はあるとみねばならない。ゆつくり時間をかけて、テストの間違つていたところを訂正させる。よくできるのである。

夜、電話をかけてみる。
「どうしても帰りが遅くなるので、相談所に出れません。」
「土曜日の午後はどうですか。」
「土曜日も遅くなります。」
「それでは、大事なときですから日曜日はどうですか。」
「日曜日は洗濯があつたり、いろいろ用事があつて……」
これではとりつくしまもない。

日曜日に自宅の前の用水路に入つて掃除をしていると、自転車にのつた三人組が通りかかる。急にスピードをゆるめる。
「おはようございます。」
「おう君か、あれから来んが、元気かね。」

「はい、いろいろ忙しいので……」
自転車が一列にならび、ゆつくりとスピードを出す。

「あれは誰ぞ」「あれは公民館の先生ぞ」「公民館に先生がおるか」「うん、ええ先生ぞ」と話しながら遠ざかっていった。いくらええ先生ぞと言われても、来ないものはしょうがない。

あれでは毎日のように放課後は遊びまわっているにちがいない。中学に入つても変化はあるまい。高校に入れてもオートバイを乗りまわすぐらいのことであろう。

非行化する心配のある者ではないが、持つて生まれた力を十分のばす機会もないまま大きくなっていく。市内には、まだまだほかにもこのような子どもがいるのであるまいか。
薬をのますわけではない。手術をするわけでもない。お母さんが、ちよつとその気になつて手をさしのべてくれさえすれば、ぐんぐん伸びる子どもがいるのではあるまいか。資源の活用といつても、人的資源ほど貴重なものはないはずであるのに……。